

特別講座「看観楽学」に関する一考察 ～高齢者疑似体験演習に焦点をあてて～

山崎 智子, 小楠 範子, 山下 美穂, 小湊 博美, 木村 孝子

要 旨

本稿の目的は、新規開講した特別講座「看観楽学」の演習の一つである高齢者疑似体験に焦点を当てて学生の学びと今後の課題を明らかにすることである。演習に参加した学生にアンケートを実施した。高齢者疑似体験演習を通して気づいたことに関する自由記述は全部で39記述あり、その内訳は、【生活・外出体験の共通事項】に関して15記述、【生活体験編】に関して15記述、【外出体験編】に関して9記述であった。入浴・掃除・洗濯等の日常生活と屋外での買い物を体験する高齢者疑似体験演習は、学生に高齢者の生活の困難さなどのネガティブな面への気づきだけに留まらず、高齢者に必要な援助のありかたについても考える視点を与えていることが明らかになった。

キーワード：高齢者疑似体験，体験学習

I. はじめに

本学では、平成23年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正に合わせて平成24年度にカリキュラムの改正を行った。上記の指定規則の変更は、平成22年の保健師助産師看護師法の一部が改正された内容を受けて行われたものであり、保健師・助産師・看護師教育の充実を目的に行われたものである。したがって本学においても保健師・助産師・看護師それぞれの教育内容の見直しを行い、平成24年度から新カリキュラム開始となっている。

看護師教育課程において、新規開講となった科目の一つに特別講座「看観楽学」がある。「看観楽学」は、3年次の前期に看護師のみ選択の学生に対して開講した選択科目である。「看観楽学」のねらいは、ネーミングの通り「五感をつかって楽しく看護を学ぶ」である。生活体験の少ない学生は臨地実習に対する不安も大きいといわれている。3年次後期の臨地実習での学びを充実したものとするためにも、まずは“看護を学ぶ楽しさ”を体験できる演習にしたいと考えた。

臨地実習は、自らのからだや心の、知能や感覚などを自分のすべてを駆使して“知る・わかる”レベルから“実感できる・実際に感じて理解できる”レベルに到達できることが期待できる体験学習¹⁾である。不安を抱えて臨地実習に臨んでは、学生のすべてを駆使することは難しいと考える。過度に緊張せず積極的に臨地実習に臨むことができるために、学

生が楽しく参加できる講座を目指した。体験学習が、机上での学習以上に学生自身の心を揺さぶり、多くのことに気づく¹⁾ことを実感することで、体験すること自体に意味があることを理解してほしいという願いがあった。

また、学生自身が“看護を学ぶ楽しさ”を体験するためにもまずは学生の学習ニーズをくみ取ることからはじめたいとの思いから、演習の企画の段階から学生が一部参加し、学生と教員のそれぞれがテーマを出し合うことから始めた。学生の学習ニーズを尊重しながら演習計画を立案した(表1)。「看観楽学」で行った演習は5種類あり、「高齢者疑似体験(中級編)」はその一つである。

本報告では、「看観楽学」の演習の進め方について検討していく一助として、「高齢者疑似体験」に焦点を当てることとした。

本報告の目的は、高齢者疑似体験からの学生の学びを明らかにし、今後の「高齢者体験」の演習の進め方についての課題を明らかにすることである。

II. 高齢者疑似体験(中級編)の展開方法

1. 演習の内容

本学では、2年次生前期に「高齢者疑似体験」を行っている。よって2年次生の演習を“初級編”とし、3年次生に実施する演習を“中級編”とした。初級編は、高齢者体験装具*を着用しての歩行・階段の昇降が中心となっている(表2)。中級編は、屋内での掃除・洗濯や屋外での買い物などIADL(instrumental activities of daily living: 手段的日常生活行動)を意識

した内容となっている（表 3）。

2. 演習に対する安全対策

高齢者体験装具を装着した状態で屋外へ出かける演習（買い物や横断歩道の横断）の危険性に対して以下のような安全対策を行った。2人組の学生に教員1名が付き添った。演習で利用するデパートやバス会社に対しては、事前に連絡をし、協力を依頼した。タクシーも事前に予約し、演習内容を連絡した。横断歩道での演習に対しては、警察の担当者に相談し

了解を得た。

3. 楽しく学ぶ工夫

演習名は、学生が覚えやすく親しみを持ちやすいように「老いたろう体験（中級編）」とし、演習内容を「老いたろう新聞」という形でまとめた。新聞の形にしたのは、演習中の写真を利用し、表現がしやすく、新聞を作成しているプロセスで学生が楽しみながら体験を振り返ることができると考えたからである。

表 1. 「看観楽学」の内容

企 画		日 程	担当教員
①スキルアップ ～ 学び方のコツ ～		90 分×1	担当：1名，補助：1名
②スキルアップ ～ 心電図 ～		120 分×2	担当：1名，補助：1名
③スキルアップ ～ 聴診法 ～		90 分×2	担当：5名
④高齢者疑似体験 ～中級編～	生活編	90 分×2	担当：8名
	外出編	90 分×2	
	新聞の作成	120 分×1	
⑤日本古来の遊び	～ 手を使った遊び ～	150 分×1	担当：4名
	～ 声を響かせた遊び ～	90 分×1	担当：1名 補助 7名
全体のまとめ		90 分×1	担当：1名 補助 4名

表 2. 高齢者疑似体験（初級編）の演習内容

時 間	内 容
90 分	・階段昇降（1階～4階）
	・起き上がり（教室内の床で仰臥位からの起き上がり）
	・自動販売機で飲み物（缶・ペットボトル・紙パック）を購入
	・購入した飲み物を自分で開けて飲む

表 3. 高齢者疑似体験（中級編）の演習内容

	時 間	内 容
1 日目	90 分×2	生活編 ・トイレ体験：和式トイレ・洋式トイレ・障害者トイレで実施 ・更衣：前開きのパジャマの上衣の着脱 ・入浴体験：福祉用具（シャワーチェアの使用・浴槽手すり・バスボード・浴槽台）を用いての入浴 ・掃除体験：立位と座位での掃除機の使用，拭き掃除 ・洗濯体験：通常の高さの物干し台と低い物干し台を使用しての比較，洗濯バサミの活用 ・お茶の準備：急須にお茶の葉を入れて湯呑で飲む
2 日目	90 分×2	外出編 ・路線バス：バスの乗り降り，運賃の支払い ・買い物体験：買物リストと代金を持参しての買い物（商品探しと支払い），エスカレーターの使用 ・横断歩道：横断歩道を渡る ・タクシー：タクシーの乗り降り
3 日目	120 分	まとめ：「老いたろう新聞」の作成

学生が楽しく買い物ができるように、購入する品物（お弁当、和菓子、子ども服、コーヒー豆等）を書いたメモと代金を封筒に入れて各学生に渡し、購入後は依頼主（看護学科教員）に手渡しするという“おつかい”という形にして遊び感覚を付加した。

学生が達成感を得られるように演習の内容を本学のホームページで公開したり、「老いたろう新聞」を大学の玄関等に掲示したりするなどして学生の学びを発表する機会をつくった。

Ⅲ. 研究方法

1. データ収集方法

「看観楽学」と「高齢者疑似体験（中級編）」に対する満足度や感想を自由に記述するアンケートを参加学生に実施し、演習に対する評価を得た。アンケートの回収箱を設置し、各自が後日提出するようにした。

2. 分 析

演習に関する満足度は、単純集計を行い、自由記述に対しては質的帰納的に分析を行った。分析の結果は、複数人で意見交換し妥当性の確保に努めた。

3. 倫理的配慮

アンケートを配布する前にアンケートの目的、協力は自由意思であること、プライバシー保護等を口頭で説明し、アンケート用紙の提出をもって協力への同意とみなした。

Ⅳ. 結 果

「高齢者疑似体験（中級編）」に参加した学生は12名であった。特別講座「看観楽学」に参加した学生に対して行ったアンケートの結果、「高齢者疑似体験（中級編）」に対して「大変満足」と回答した者が12名中11名であり、「不満でも満足でもどちらでもない」が1名であった。

「高齢者疑似体験（中級編）」を通して気づいたことに関する自由記述は全部で39記述あり、その内訳は、【生活・外出体験の共通事項】に関して15記述、【生活体験編】に関して15記述、【外出体験編】に関して9記述であった。

【生活・外出体験の共通事項】【生活体験編】【外出体験編】のそれぞれの記述を分析した結果を以下に示す。なお、＜ ＞はカテゴリー名であり、「 」はロウデータ、（ ）はロウデータを補うために著者が加筆したものである。

1. 生活・外出体験の共通事項

生活・外出体験の共通事項からは、＜怖さと危険性の理解＞＜高齢者の気持ちの理解＞＜ケアの振り

返り＞という3つのカテゴリーが見出された。

＜怖さと危険性の理解＞とは、高齢者疑似体験全般を通して、高齢者が感じるであろう怖さと危険性を学生が疑似体験し、理解していることである。学生は、「特に階段を下りる時が怖く」、「足元の少しの段差でも転倒につながる危険がある」と述べるなど、階段昇降といった生活の中での具体的な動きの中で高齢者が感じる怖さと危険性を理解していた。

＜高齢者の気持ちの理解＞とは、高齢者疑似体験全般を通して、高齢者の身体の痛みや気持ちを理解していることである。例えば学生は、「“老いたろう”セットを外した時、身体のいろいろな箇所に痛みを感じた。この筋肉をよく使っているのかと実感できた」と述べていた。高齢者疑似体験は、高齢者の足腰の痛みの疑似体験の機会でもあり、身体疲労が多くなる高齢者の気持ちを理解する機会ともなっていた。また、高齢者体験装具は、難聴体験もできる装備になっているが、これによって聞こえづらさを体験した学生は「聞こえづらいと話すのが億劫になる」と述べるなど、加齢による身体機能の変化に伴う高齢者の気持ちを理解することにもつながっていた。

＜ケアの振り返り＞とは、高齢者疑似体験全般を通して、学生自身が今までに行ってきた演習や実習でのケアを振り返って反省し、気づきを今後のケアに生かしたいと考えていることである。学生は、演習でのペーパー・ペイシエントやこれまでの実習で出会った患者に対して「イメージだけでわかっているつもりになっていた」と自身を振り返り、「こんなリスクを予測できたら自分の援助の仕方は違っていたと後悔した」と述べるなど、高齢者体験と自身のこれまでのケアを引き寄せて考え、ケアの振り返りをしていた。

2. 生活体験編

生活体験編からは、＜日常生活の困難さ・不便さの実感＞＜対象に応じたケアの工夫の必要性＞という2つのカテゴリーが見出された。

＜日常生活の不便さ・困難さの実感＞とは、高齢者体験装具を装着して日常生活を疑似体験してみることで、今まで気づけなかった日常生活における不便さや困難さを具体的に実感していることである。例えば排泄動作においては、杖や手すりを使って便座にたどり着いたものの、「杖が落ちたら大変だと思って、杖が倒れないようにするためにどう立てかけるか迷った」と述べており、思案の末にどうにか杖を立てかけた後は、「トイレにしゃがむことやズボンを下ろすことが大変」だったと実感するなど、「高齢者の方が困難に感じている部分を肌で感じるこ

ができた」体験となっていた。

＜対象に応じたケアの工夫の必要性＞とは、高齢者が安心感をもって生活したり、生活の中で自分にできたりすることを増やすためにも、福祉用具の選択も含め、対象に応じたケアの工夫が必要であると実感していることである。例えば、洗濯物を干す場面では、日頃学生が行っている方法で実施すると「身体への負担が大きく、(転倒などの)恐怖を感じやすい」と感じていた。しかし、対象に応じたケアの工夫を検討し、物干し竿を座位で干せる高さに調整し、立位ではなく座位で動作を行うこと、干した洗濯物は、洗濯バサミで洗濯物を押さえ、ひっぱってシワを伸ばすなどの体験をすることで、「できないことも工夫するとできる」と実感していた。また、浴槽に入る体験では、「以前、浴槽の中に椅子(浴槽台)を入れているのを見て理由が理解できなかったが、今回の体験からその理由が理解でき」、「福祉用具の必要性も理解」できたと感じるなど、学生は、福祉用具の選択も含めて、対象に応じたケアの工夫を行うことの必要性を実感していた。

3. 外出体験編

外出体験編からは、＜社会生活における困難さと恐怖＞＜他者の援助のありがたさの実感＞という2つのカテゴリが見出された。

＜社会生活における困難さと恐怖＞とは、高齢者体験装具を装着して実際に外出し、買い物などの体験をすることで、社会生活における困難さと恐怖を体験していることである。例えば、買い物の場面では、「小銭をつかんだり(財布代わりの封筒に)戻すことが難しかった」と感じ、「買い物のとき、店員さんの声が聞きとりにくかった」と述べるなど、学生が日頃当たり前に行動している場面の一つひとつ、社会における他者とのかわりに困難さが伴うことを実感していた。また、「すばやく動けないのでバスに間に合うかなど社会で暮らしている中で大変さみたいなものを感じた」「外出は学内では感じられない心配・不安を感じた」と述べるなど、社会の中で暮らす高齢者の困難さや大変さに思いを巡らす機会ともなっていた。さらに、横断歩道を歩いたり、公共交通機関のバスに乗ったりする場面では、「横断歩道は、青になってすぐ渡り始めたが、(自分の歩く)スピードがゆっくりで渡るのがギリギリだった」と述べるなど、例えばペースはゆっくりでも、高齢者は信号が青の間に必死に横断歩道を渡っており、ある意味、恐怖をかかえながらの横断であることを実感していた。

＜他者の援助のありがたさの実感＞とは、外出体

験の際に社会における困難さと恐怖を感じる一方で、他者の援助があることのありがたさを学生が実感していることである。今回の外出体験の際は、公共交通機関のバスを利用したが、高齢者体験装具を装着してバスのステップを昇降することは容易ではなく、通常より時間がかかるものであった。しかし、バスの運転手は学生をあせらせることなくゆっくりと待ってくださった。また、買い物帰りに使用した大型タクシーでは、老いたろうセットを装着している学生が、タクシーの乗り降りが容易にできるよう運転手が踏み台を準備してくださった。このように例え高齢者疑似体験であっても周囲の人たちが日頃高齢者に接しているようにかかわってくださることで、学生は「人に助けてもらったりするととても助かった」と述べるなど、他者の援助のありがたさを実感していた。

V. 考 察

1. 外出体験の意義

学生の自由記述を分析した結果、外出体験編から＜社会生活における困難さと恐怖＞というカテゴリが見出された。高齢者理解のために高齢者疑似体験を取り入れているいくつかの報告は、学生が高齢者疑似体験を通して、高齢者の身体的な機能低下や心理面への影響を具体的に感じ、援助の気づきへとつながっていることが示されている²⁾が、生活者として的高齢者にまで視野を広げ、援助への気づきにつながっている報告は少ない。本研究結果は、実際に高齢者が生活する社会に出ていく外出体験の導入が、生活者として的高齢者を理解する一助となり得ることを示しているといえるだろう。今回の高齢者体験装具での外出体験編は、学生にとって、高齢者が外出する際にどのような困難さや恐怖を体験し得るかということを具体的に体感できる機会であり、高齢者が外出に対して消極的となり、社会とのかわりが希薄化しやすい³⁾背景を理解するのに役立つ体験であったと考えられる。日常生活を自分の力で行えるためには、基本的日常生活能力だけでなく、コミュニケーション能力や社会的環境など複合的要素が関連している⁴⁾ともいわれており、高齢者を生活者としてとらえるためには、単に身体的な機能面のアセスメントだけでなく、社会的環境なども含めてアセスメントしていくことの重要性に気づき得る体験学習となることが期待できる。

外出体験編から見出された＜社会生活における困難さと恐怖＞は、ある意味、ネガティブな印象であるが、一方で学生は外出体験を通して、＜他者の援助のありがたさの実感＞を体験していた。＜他者の

援助のありがたさの実感>を抱くことで、<社会生活における困難さと恐怖>というネガティブな印象とのバランスを保持することができたともいえるだろう。今回の外出体験においては、学生2人に教員が1名付き、学生の安全面への配慮を行った。また、学生が利用するデパートやバス会社、タクシー会社にも事前に連絡を入れるなど学生が安全に安心して体験学習ができるよう調整を行った。これらの調整が、結果的に<他者の援助のありがたさの実感>を抱く環境作りにつながったとも考えられる。どのような体験学習も学生を心身ともに傷つけてしまう危険をはらんでいる¹⁾ことが指摘されており、高齢者疑似体験が否定的印象^{5,6)}のみに終わらず、効果的な学習の機会となるためにも、学生が安全に安心して体験学習ができる環境づくりを整えていくことも重要な課題といえるだろう。

2. 生活体験の意義

生活体験編から学生は、高齢者の<日常生活の困難さ・不便さの実感>とともに<対象に応じたケアの工夫の必要性>を学んでいた。対象に応じたケアの工夫の必要性に気づくことができたのは、高齢者の身体に不自由があっても環境因子をアセスメントすることで高齢者の潜在的能力を引き出すことができる、つまり環境因子の工夫次第で洗濯や入浴などの生活行為を今まで通りに実施できると実感できたためであると考えられる。このような考え方は、2001年にWHOが採択したICF(International Classification of Functioning, Disability: 国際生活機能分類)の考え方である。ICFは、ICIDH(International Classification of Impairments, Disabilities and Handicaps: 国際障害分類)の改訂版である⁷⁾。その改訂の主な特徴は、ICIDHでは「～できない」というマイナス面での見方が中心であったのに対して、ICFでは生活機能というプラス面または中立的な表現を用いた捉え方であり、かつ環境因子等を加えた構成になっている⁷⁾ことである。ICIDHの障害のとらえ方が、機能障害があると能力障害・社会的不利につながると捉えられやすいのに対し、ICFの障害のとらえ方は、例え機能障害があってもそのまま能力障害(活動制限や参加制約)につながるとは限らない、つまり環境を整えることで生活機能を維持できる⁷⁾という考え方である。福祉用具を用いて入浴が容易にできることや物干し台の高さを工夫することで安全に洗濯物が干すことができるという体験は、環境因子をアセスメントすることの大切さを実感すると同時にICFの考え方を理解する演習にもなりうると考えられる。

3. 疑似体験の学習効果

“知る、わかる”レベルと“実感できる・実際に感じて理解できる”レベルの大きな違いは、感情が伴うことである¹⁾。疑似体験は、自らの身体を使つての実験であることから、想定外の場面に直面し、そこで想像もしなかった感情が起きることがある。疑似体験は、対象の立場に自分を置き換えて想像する方法以上の気づきができることが期待できる。「聞こえづらいと話すのが億劫になる」「トイレで杖が倒れないように置くのに苦労した」「外出は学内では感じられない心配・不安を感じた」という学生の感想は、疑似体験だからこそ気づくことができた内容だと考える。

適切な看護を提供するには、対象理解が重要であり、対象理解の方法として疑似体験は学習効果が大きい。考えられる生活場面の設定を行って机上で想像することの限界を理解することも重要であると考ええる。なぜなら、学生の「わかっているつもりになっていた」という気づきは、自身を謙虚に反省し、対象理解の難しさを実感する機会にもなっている。疑似体験の学習効果を実感し、体験することの重要性を認識することは、常に対象理解のために対象に向き合い、対象に学ぶというケアする者のあるべき姿を理解する機会となることが期待できる。

このように感情を伴うがゆえに対象理解につながりやすい疑似体験であるが、一方で、高齢者疑似体験においては体験時のネガティブな感情がそのまま高齢者へのネガティブな見方につながってしまうことも指摘されている^{5,6)}。高齢者疑似体験が単なる否定的な感情を羅列した表面的な感想とならないためにも、体験後の感想を共有し、高齢者への看護援助を導き出す話し合いの過程が重要であるといわれているが⁸⁾、本体験では高齢者疑似体験後に「老いたろう新聞」を作成する機会を設けた。新聞作成の過程においては、学生はグループメンバー間で体験時に感じたことを自由に出し合いながら、第三者に自分たちの体験の何を伝えたいのかを考え、テーマを設定し新聞構成を考えていった。新聞作成時はイラストを描く学生、写真を貼り、コメントを記入する学生など、それぞれの得意分野を生かしながら役割を分担し、「老いたろう新聞」を完成させていった。高齢者疑似体験によって、<怖さと危険性の理解><社会生活における困難さと恐怖>といったネガティブな側面の気づきがありながらも、最終的には、ほとんどの学生が「高齢者疑似体験」に大変満足という評価を示した背景には、「老いたろう新聞」の作成プロセスが重要な役割を果たしたことが推測される。「老いたろう新聞」は、ただ単に第三者に学生の体験

を伝える手段に留まらず、その作成プロセスは、高齢者疑似体験で生じた様々な感情を整理し、高齢者への援助のありようを学生間で共有し得る大事な学習の機会となっていたのではないだろうか。

VI. 今後の課題：効果的な体験学習としていくために

先に述べたように学生の高齢者疑似体験に関しては、体験時のネガティブな感情がそのまま高齢者へのネガティブな見方につながってしまうも指摘されている^{5,6)}。実際、本体験からもく怖さと危険性の理解＜社会生活における困難さと恐怖＞といったネガティブな側面の気づきが見出された。しかし、学生はネガティブな気づきだけに留まらず、そこから高齢者に必要な援助のありようについても考えていく視点をもちあわせていた。

このことが可能となった背景には、まず、学生の安全面を考慮し、学生が安心して体験学習ができる環境づくりを整えたことがあげられるだろう。疑似体験は、自らの身体を使つての実験であり、想定外の場面に直面し、そこで想像もしなかった感情が起きることがある。このことを考慮し、今後も学生が安全に安心して体験学習ができる環境づくりを整えていくことも重要な課題といえるだろう。

二つ目に、疑似体験後に「老いたろう新聞」を作成する機会を設けたことがあげられるだろう。「老いたろう新聞」作成プロセスは、高齢者疑似体験で生じた様々な感情を整理し、高齢者への援助のありようを学生間で共有し得る大事な学習の機会となっていたと考えられる。今後も体験後の気づきを振り返るプロセスを丁寧につむことが重要になるといえるだろう。

今回、疑似体験の学習効果をあげる上で、疑似体験後の「老いたろう新聞」作成プロセスにも意義があったことが示唆されたが、今回の演習では、グループ毎で「老いたろう新聞」を作成したものの、それを全体で共有する場を設けることが時間の制約上できなかった。できあがった「老いたろう新聞」は学内外の人が出入りする場に掲示するだけに留まり、掲示した新聞の反響を学生が見聞きすることはなかった。

今後の課題としては、作成した「老いたろう新聞」を用いたプレゼンテーションの機会を設けることについても検討する必要があると考える。プレゼンター

ションの機会を設けることで、学生間の学びがより深まり、看護の視野が広がっていくことが期待されるのではないだろうか。また、「看観楽学」の五感をつかって楽しく学ぶことの意義を学生がどのように捉えたか検証することも必要である。

文 献

- 1) 大塚久美子：体験学習・解説．藤岡完治：わかる授業を作る看護教育法3 シミュレーション・体験学習．第1版，医学書院，東京，2000，133 - 143
- 2) 岩鶴早苗，水主千鶴：老人看護学における教育方法の検討．和歌山県立大学看護短期大学部紀要5．55-61，2002
- 3) 坂口千鶴：仕事と余暇を楽しむ．川島みどり：老年看護学．第1版，看護の科学社，東京，2010，199-207
- 4) 塚本恵，小川なお子，金城利香，當山富士子，大川嶺子，玉代勢良江，秋坂真史：沖縄における在宅百歳老人の生活と介護に関する研究．沖縄県立看護大学紀要2：9-17，2001
- 5) 柿川房子，石川睦弓，佐藤敏子，甲斐衣津子，中野正孝：老年看護授業展開 高齢者疑似体験学習に関する検討．三重看護学誌3(1)：175-182，2000
- 6) 竹内美由紀，横川絹恵：体験学習による学習効果－高齢者疑似体験記録の内容分析を通して．香川県立医療短期大学紀要2：107-114，2001
- 7) 結城美智子：リハビリテーションに用いられる主要な概念．奥宮暁子：ナーシング・グラフィカ成人看護学6 リハビリテーション看護．第2版，メディカ出版，大阪，2010，24-41
- 8) 川崎彰子，千葉京子：看護基礎教育における高齢者疑似体験の学習効果 小グループでの討議記録を質的に分析して．日本赤十字武蔵野短期大学紀要17：21-27，2004

注 釈

* 高齢者体験装具は、80歳前後の高齢者の運動能力に低下させる装具である。本学では、(株)京都科学で販売している高齢者体験装具(商品名おいたろう)を使用している。装具の内容は、イヤーマフ・特殊メガネ・チョッキ(重り4個を含む)・肘サポーター・膝サポーター・手袋・手首用重り(2個)・足首用重り(2個)・杖などである。